

柔道の試合におけるルール変更の影響：

2017年と2018年の比較

櫻庭 あさひ（秋田大学）

1. 目的

本研究の目的は、2017年、2018年の柔道国内大会の競技結果を対象に競技内容の変化について分析し、「合わせ技」の復活がそれぞれの大会ごとに、競技内容にどのように影響しているのかを明らかにすることである。また、ルール変更が競技内容に与える影響を明らかにすることは、ルールに対応した練習方法や戦術を考案するための基礎となると考えられる。

2. 研究方法

- 1) 対象者とする大会：2017年と2018年の全日本選抜体重別選手権大会(2017年95試合、2018年97試合)、全日本選手権大会(2017年42試合、2018年42試合)、全日本女子選手権大会(2017年36試合、2018年34試合)、全日本ジュニア体重別選手権大会(2017年356試合、2018年358試合)、全日本カデ体重別選手権大会(2017年95試合、2018年97試合)、全国高校総合体育大会柔道競技個人試合(2017年658試合、2018年652試合)
- 2) 手続き：全日本柔道連盟ホームページの大会結果、機関誌「柔道」、全国高校総合体育大会ホームページの大会結果をもとに、勝敗決定場面（本戦、延長戦）、勝ち種類（一本、優勢、反則）、決まり技（投げ技、固め技）の3つの項目で分析する。勝敗決定場面(本戦、延長戦)については本戦で勝敗が決定した試合と延長戦で勝敗が決定した試合に分類する。勝ち種類(一本、優勢、反則)については「一本勝ち」、「優勢勝ち」、「反則」に分類する。決まり技(投げ技、固め技)については、投げ技で勝敗が決定した試合と固め技で勝敗が決定した試合に分類する。
- 3) 分析方法：勝敗決定場面（本戦、延長戦）、勝ち種類（一本、優勢、反則）、および決まり技（投げ技、固め技）について、2017年

と2018年の違いでクロス集計を行い、カイ2乗検定により検定する。その結果、有意であった場合には、残差分析を行う。

3. 結果と考察

1) 勝敗決定場面(本戦、延長戦)

勝敗決定場面についてカイ2乗検定の結果、2017年と2018年における変化が有意であった大会は、全日本ジュニア体重別選手権大会と全国高校総体である。残差分析を行った結果、この2大会は2017年より2018年の方が本戦で勝敗が決定した試合数が多くなっているといえる。これは「合わせ技」の復活により早い段階で勝敗が決定する試合が多くなったためと考えられる。よって全日本ジュニア体重別選手権大会と全国高校総体は、勝敗決定場面において「合わせ技」の復活の影響を受けているといえる。

2) 勝ち種類(一本、優勢、反則)

勝ち種類についてカイ2乗検定の結果、2017年と2018年における変化が有意であった大会は、全日本ジュニア体重別選手権大会と全国高校総体である。残差分析を行った結果、この2大会は2017年より2018年の方が「一本勝ち」で勝敗が決定した試合数が多くなっているといえる。これは、「合わせ技」の復活により「一本勝ち」で勝敗が決定した試合が多くなったと考えられる。よって日本ジュニア体重別選手権大会と全国高校総体は、勝ち種類において「合わせ技」の復活の影響を受けているといえる。

3) 決まり技(投げ技、固め技)

決まり技についてカイ2乗検定の結果、2017年と2018年における変化が有意であった大会は、全日本女子選手権大会、全日本ジュニア体重別選手権大会、全日本カデ体重別選手権大会および全国高校総体である。残差分析を行った結果、全日本女子選手権では2017年より2018年の方が固め技で勝敗が決定した試合が多くなっている

といえる。全日本ジュニア体重別選手権大会、全日本カデ体重別選手権大会および全国高校総体では2017年より2018年の方が投げ技で勝敗が決定した試合数が多くなっているといえる。全日本女子選手権大会については、これまでの研究においても女子は男子に比べて固め技で勝敗が決まりやすいと言われており、固め技で確実に「一本」を取ろうとする試合展開が多くなったことが要因と考えられる。全日本ジュニア体重別選手権大会、全日本カデ体重別選手権大会および全国高校総体については、「合わせ技」の復活により積極的に「一本」を取ろうと立ち技の攻防が活発になったことが要因と考えられる。よって全日本ジュニア体重別選手権大会、全日本カデ体重別選手権大会および全国高校総体は、決まり技において「合わせ技」の影響を受けているといえる。

4. 結論

本研究の目的は、2017年、2018年の国内大会の競技結果を対象に競技内容の変化について分析し、「合わせ技」の復活がそれぞれの大会ごとに、競技内容にどのように影響しているのかを明らかにすることである。

2017年と2018年の全日本選抜体重別選手権大会、全日本選手権大会、全日本女子選手権大会、全日本ジュニア体重別選手権大会、全日本カデ体重別選手権大会、全国高校総体を対象に競技内容への影響を分析した。それぞれの大会において、勝敗決定場面（本戦、延長戦）、勝ち種類（一本、優勢、反則）、決まり技（投げ技、固め技）という視点で分析を行った。その結果、全日本ジュニア体重別選手権大会と全国高校総体において2017年大会より2018年大会が「一本勝ち」で勝敗が決定した試合数が多くなっているという影響が明らかになった。また、2017年大会より2018年大会が本戦で勝敗が決定した試合が多くなるという影響も見られた。そして、全日本ジュニア体重別選手権大会、全日本カデ体重別選手権大会、全国高校総体において2017年大会より2018年大会の方が立ち技で勝敗が決定した試合数が多くなったという影響も見られた。全日本選抜体重別選手権大会においては、どの観点からも影響は見られなかった。このことから、競技力の高い選手が多く出場する大会では「合わせ技」の復活による

影響を受けにくいということも分かった。

この知見を踏まえて、「合わせ技」の復活というルール変更に対応するためには、確実に「一本」や「技あり」を取ることができる技を身に付けることが重要である。そして、スタミナを強化し積極的な攻撃を行うことで「合わせ技」の復活のルール変更を有効に活用することにつながる。

5. 主な参考文献

- 1) 橋本年一(1989), 女子柔道における固め技の行動形態と戦術に関する研究, 九州工業大学研究報告 人文・社会科学, 37, 85-99.
- 2) 野瀬清喜ら(2005), 柔道の国際化と日本柔道の今後の課題(第四報)ー国際柔道連盟試合審判規定と講道館柔道試合審判規定の比較を中心にー, 埼玉大学紀要教育学部(教育科学), 54(1), 249-257.
- 3) 布田英嗣(2017), 平成29年皇后盃全日本女子柔道選手権大会, 柔道, 88, 6, 46-55.
- 4) 布田英嗣(2018), 平成30年皇后盃全日本女子柔道選手権大会, 柔道, 89, 6, 48-60
- 5) 尾形敬史・春日井淳夫・桐生習作・鮫島康太(2017), 平成29年全日本選手権大会, 柔道, 88, 6, 10-31.
- 6) 尾形敬史・春日井淳夫・桐生習作・鮫島康太(2018), 平成30年全日本選手権大会, 柔道, 89, 6, 15-38.
- 7) 坂本道人ら(2017), ルール変更に伴う競技内容の分析ー全日本柔道選手権大会・全日本女子選手権大会(2010・2011年)を対象としてー, 福岡大学スポーツ科学研究, 47(2): 1-10.
- 8) 高橋隆太郎・三戸範之(2012), 柔道におけるルール変更による試合内容への影響, 武道学研究, 45, 68.
- 9) 辻原謙太郎・野瀬清喜(1989), 柔道の競技分析的研究ー男子と女子の競技内容の比較ー, 埼玉大学紀要教育学部(教育科学II), 38, 117-127.